The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東洋の「知層」と西洋の「知層」 : 知の考古学的研究
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2014, 2013, p. 33-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77390
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

東洋の「知層」と西洋の「知層」

——知の考古学的研究——

伊勢　芳夫

1．知の考古学的研究について

ミシェル・フーコー(Michel Foucault)が『言葉と物(*Les mots et les choses. Une archéologie des sciences humaines*)』[1] において、西欧の中世から、ルネッサンス期、古典主義時代、そして19世紀へと、西欧人の思考の変容の推移を知の考古学的方法で分析を試みたことに対して、この西欧の「知の地層（知層）」[2] の分析を非西欧地域の「知層」分析に敷衍するために、自然科学的な意味での「構造主義」で読み直すことによって、「西洋臭」が脱臭されて、非西欧人の研究者にとってきわめて示唆に富む歴史の動態力学が見えてくると思われる。別のいい方をすれば、ややもすれば非西欧の「近代化」とは、西欧モデル（構造）を移植することによって、つまり「西洋化」することによってなされた、あるいは、なされつつあると考えられがちだが、それぞれの社会が堅固な近代社会を構築するためには、西欧諸国がそうであったように、「近代以前の構造」からの構造的転換が必要であると考える。そのためには、繰り返しになるが、自然科学的な意味での「構造主義」の立場に立って非西欧の近代化のプロセスをフーコーの知の考古学的手法を使って考察することが重要である。ここで〈構造主義〉に括弧をつけるのは、エドワード・W・サイード（Edward W. Said）が *Beginnings* で痛烈に批判した構造主義、たとえばロラン・バルト(Roland Barthes)の *S/Z* のように作品を解剖してバラバラにしてしまうことで作品の有機的な意味を喪失してしまうような構造主義と差別化をするためである。[3] 個々の「部位」に分解してその要素を分析することが目的ではなく、あくまでも有機的な連関をもった構造体としてとらえることである。また、「自然科学的な意味で」というのは、分子から人工建造物、単細胞生物から人間にい

---

[1] Michel Foucault, *Les mots et les choses. Une archéologie des sciences humaines* に関して、本論では、『言葉と物』（渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、1974）と *The Order of Things* (New York: Vintage Books, A Division of Random House, Inc., 1994)の日本語と英語の翻訳に依拠している。また、以下の『言葉と物』からの引用は、これらの版の頁数を本文に記入。

[2] 「知の地層（知層）」とうのはフーコーの用語ではない。「知層」という概念はフーコーの知の考古学的方法から筆者が着想した概念であり、西欧の知の構造を相対化し、いかなる社会にも層を成す知の構造が存在するという前提の下で、非西欧社会の知の構造にも知の考古学的方法論を適用するために導入した。

[3] Edward W. Said, *Beginnings* (New York: Columbia University Press, 1985)の第5章を参照。

たるまで、この宇宙に存在するものはすべて「構造」をもっていることを前提にするということである。そのことによって、「借り物」、「借用」ということだけで構造そのものが転換しなければ——張りぼてのようなものはできたとしても——これまでとは違う新たな社会が出現するということがないことを認識できるであろう。そのような立場に立つとき、次の引用におけるフーコーの 19 世紀に現れた〈歴史〉構造の転換についての分析から、一つの検討すべき問題に気付くのだ。

> このような〈歴史〉を特徴づけていたもの——すくなくとも、その一般的特質において、このような意味での[19 世紀以前の] 〈歴史〉をわれわれの歴史との対立関係において規定することのできるもの——それは、人類の時間を世界の生成（ストア学派におけるように一種大きな宇宙的時間継起のなかにおける）にしたがって秩序づけ、もしくは逆に、人類の目的の原理と運動を自然の最小の部分にまで拡大して（いささかキリスト教的〈摂理〉のやり方で)、すべての人間、それにともなって、物、動物、生きているにせよ生命をもたぬにせよそれぞれの存在から、大地のもっとも静まりかえった表情にいたるまで、すべてを、おなじ偏倚、おなじ下降かおなじ上昇、おなじサイクルの状態において引きずっていくとでもいったような、そのさまざまな時点それぞれにおいて画一的な、なめらかで大きな一種の歴史を人々が考えていた、ということであろう。ところが、十九世紀初頭、西欧の《エピステーメー》の大きな顚倒のなかで打ち破られたものこそ、この統一性にほかならなかった。人々は自然に固有の歴史性を発見し、生物のそれぞれの大きなタイプについて、環境との合致の諸形態を規定さえし、その結果、それぞれの生物のタイプの進化の輪郭を規定することも可能となりだした。さらに、労働や言語のような人間独異の諸活動が、それら自身のうちに、物と人間に共通な大きな物語のなかにはその場所を見いだしえぬ、ある種の歴史性を保持していることを示すことができた。(『言葉と物』、389 頁）（下線筆者）

フーコーが描きだす 19 世紀までの西欧世界は、この世界のあらゆる存在のなかで言語（人間）が絶対的な地位を占めており、「なめらかで大きな一種の歴史」[4] をもつ世界、いわば、言葉＝世界の関係にあった。なぜなら、人間の頭から生み出す言説が、滔々と大河のように流れ行くのが歴史であるからだ。そのような捉え方は、単に『聖書』の言葉が人間の住む世界や宇宙を作りだしたという歴史的事実だけではなく、たとえば古代ギリシャから続く「円」の特権的地位が、レオナルド・ダ・ビンチやアイザック・ニュートンの人間観や宇宙観に強烈に影響を与えていたことからもわかるであろう。しかしながら、19 世紀の西欧においては、そのような言葉と言葉の独占的な連結で織りなされた「なめらか」なタブローに、「自然に固有の歴史性」[5] が楔のように割り込んできて、その「統一性」を「大き

[4] 英訳版では、「なめらかで大きな一種の歴史」は“a vast historical stream”となっている。(*The Order of Things*, p. 367)
[5] 英訳版では、「自然に固有の歴史性」は“a historicity proper to nature”となっている。(*The Order of Things*, p. 367)

な顚倒のなかで打ち破」ることにより、介入してきたそれら拘束する無数の存在と共存する総体としての世界に生きる一つの存在としての人間という認識が生まれてきたという。まさに「西欧の《エピステーメー》」のなかで、新たな世界認識と、それを表す言語やそのための知を生み出す学問が、相互作用を受けながら変質していくことで、「西欧近代」という構造を構築していくことになるのだ。ただここで非西欧の人間にとって見過ごすことができないのは、このような認識＝言語の構造的大転換が「西欧」にのみ起こったかのようにフーコーは論を進めていることである。もっともフーコーは、明示的にこのような構造的大転換を非西欧社会では起りえないといっているわけではない。しかしながら、彼の議論には、西欧以外の社会にも同様の構造転換が起きる可能性の余地に一切言及していないので、西欧に独占的地位が与えられているように読めてしまう。実際、「西洋＝近代」という言説が今日でも広く行き渡っていることからも、言及しない＝否定、と受け取られても仕方がないであろう。では、非西欧社会において、近代への大転換が西欧からの借用なしには起こりえなかった、あるいは、起りえないのであろうか。この場合、構造転換の契機とするために借用するということではなく、文字通りそっくり西欧近代のモデル（構造）を移植することによってしか近代化しないという意味である。そのような疑問に対して、筆者は、19 世紀以前の日本と、それ以降の日本の言説空間においても、日本独自の方法で、言語（神話）的言説編成から近代（分析）的言説編成への構造的変容が起ったと考える。ただし、それが西欧とは同質の構造的顚倒であったというのではない。[6]

世界に先駆けて近代化が起こった西欧は、当然のことながらそれ以降、特権的立ち位置から先導的役割を果たしていくのである。そして西欧から沸き起こった「近代化」言説形成＝編成は、渦となって世界を巻き込んでいった。それに伴って行われた西欧列強による植民地化により、非西欧地域の伝統的な文化編成は亀裂を生じさせられたのである。しかしながらその亀裂の入り方は、大きく 3 種類に分かれるであろう。1 つは、根こそぎ引きちぎられた北米アメリカやオーストラリアのようなケースである。2 つ目は、インドのように、伝統文化が下層に追いやられ、西欧近代が上層構造を作り出す場合。3 つ目は、日本のように、自らが伝統文化のなかに西欧近代を移植させていったケースである。日本の近代化のプロセスは、ある程度は西欧で進行した近代化に類似しているが、大きな違いは、西欧の場合は「近代化」が前近代と格闘しながら徐々に社会全体に浸透していったのに対して、日本の場合は、「既成の近代」を急激に伝統文化のなかに取り込んだために、浸透の仕方が西欧のように一様ではないということだ。そのために、日本社会には「伝統」と「近代」が共存しているといわれるのであるが、裏を返せば、近代化されていない部分が随所にみられるということだ。もちろん「近代＝善」・「伝統＝悪」という単純な図式ではないので、近代化されていない伝統が存在することがかえって長所となっている場合がしばしばある

[6] 西欧の《エピステーメー》と明治維新前後の《エピステーメー》に関しての比較研究は、日本語の継続性のなかに新たな西欧で生まれた概念を取り込みえたのはなぜか、そして、インドのような欧米の植民地ではなく、むしろ日本で自発的に身分制度の崩壊が起こったのはなぜか、というような問題を解決する有効な方法になりうると考える。

のだが、一方で、「近代」と「伝統」の論理のズレが、日本の針路を思わぬ方向に向けてしまうこともある。

次節では、知の考古学的分析よって西欧の「知層」を描き出したフーコーの試みが日本人の研究者が日本の「知層」を研究する際に役に立つかどうかを検証するために、西欧の「知層」との対比によって、日本の19世紀以降の「知層」をもう少し詳しく分析してみよう。

2．西欧の「知層」と日本の「知層」——言語(学)、生物学、経済学

フーコーは、『言葉と物』において、西欧において言語（学)、生物学、経済（学）が19世紀を通して大きく変質・転換していったプロセスを綿密に分析している。しかしながら、このプロセスは——『言葉と物』でフーコーは以下のことに一切触れていないが——西欧地域だけにとどまることはなかったのである。そのような変質・転換した西欧が帝国主義的拡張を推し進め、非西欧地域を飲み込んでそれらの伝統的な社会構造を破壊的に転換していくわけであるが、日本も例外ではなく、その「知層」構造が大きく変容されることになった。しかしながら、日本の構造転換について考察する際、フーコーが西欧で行ったように、言語（学)、生物学、経済学を一様に取り扱うことはできないであろう。生物学については、江戸時代、中国の影響のもと植物（薬草）を扱った本草学の書物が出版されていたとしても、生物学、そして、医学・物理学といった自然科学の分野における西欧の知識の優位性を日本人が認識することによって、堰を切ったように流入してきたのだ。ただしこのような現象が起こったことの背景として、西欧の自然科学の優位性を当時の日本人が強制されるのではなく自主的に認識したことが重要である。なぜなら、日本以外ではこのような現象は僅かにしか、あるいはまったくといってよいほど起らなかったからである。経済（学）については、江戸時代において貨幣経済がある程度発展しており、また、1871に出版した講義録でヘンリー・サムナー・メイン(Henry Sumner Maine)がインドの村落共同体について指摘しているように、[7] インドではイギリスの植民地化以前においては農地の個人所有という観念がほとんどなかったという。それに対して、日本は、鎌倉時代以降の封建制度のもと、農地の所有権に関しては西欧に近いものが形成されていったと思われる。また、貨幣経済も江戸時代を通してある程度は発達していた。したがって経済体制に関しては、自然科学のように無制限な借用というのではなく、西欧の制度・法律を学習してそれまでのものを修正していったという方が正しいと思われる。一方言語（学）についてみるとき、生物学や経済学というのは全体構造を構成する部分であるのに対して、言語（文法）は、「知層」構造の主要なビルディング・ブロック（構成要素）であり、外からの「知識」を取り込む媒体である。したがって、言語（文法）に対する西欧の影響を調べることは、日本の「知層」構造の変質・転換を知るための最も重要な考察になるだろう。もっと

[7] Henry Sumner Maine, *Village-Communities in the East and West* (London: John Murray, 1871)を参照。

も本論においては、筆者が日本の19世紀における「知層」を分析するための調査が不十分であるため、知の考古学的研究方法の試論の域を出ることはなく、したがって以下の考察はかなり大雑把なものになることをお断りしないといけない。

われわれは、ともすると言語を「透明」な媒体と考える傾向があるが、果たしてそうであろうか。もしフーコーのいうように、文法が人間の認識に大きくかかわっているのであれば、言語の意味の形成と語の順列組合せ（文法）の編成として「知層」が編成されていくのであり、西欧と日本の語源や文法の非常に隔たった言語をもつそれぞれの歴史のなかで異なった「知層」構造を形成してきたといわざるを得ない。

ここで、日本語と英語について概観してみよう。それらの言語の文法において、認識にかかわる大きな違いは、英語が作用や因果律を表すのに適しているのに対して、日本語は並置の言語であるということだ。以下に、日本人とイギリス人の小説家の代表作の冒頭部分を比較してみよう。

道がつづら折りになつて、いよいよ天城峠に近づいたと思ふ頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追つて來た。[8]

或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外に誰もゐない。唯、所々丹塗の剝げた、大きな圓柱に、蟋蟀が一匹とまつてゐる。羅生門が朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありさうなものである。それが、この男の外には誰もゐない。[9]

He sat, in defiance of municipal orders, astride the gun Zam-Zammah on her brick platform opposite the old Ajaib-Gher—the Wonder House, as the natives called the Lahore Museum. Who hold Zam-Zammah, that "fire-breathing dragon," hold the Punjab; for the great green-bronze piece is always first of the conqueror's loot.[10]

He was an inch, perhaps two, under six feet, powerfully built, and he advanced straight at you with a slight stoop of the shoulders, head forward, and a fixed from-under stare which made you think of a charging bull. His voice was deep, loud, and his manner displayed a kind of dogged self-assertion which had nothing aggressive in it. It seemed a necessity, and it was directed apparently as much at himself as at anybody else. He was spotlessly neat, apparelled in

[8] 川端康成、「伊豆の踊子」、『現代日本文學全集　37　川端康成集』、（東京：筑摩書房，1955）、15頁。
[9] 芥川龍之介、「羅生門」、『日本近代文学大系　38　芥川龍之介集』、（東京：角川書店，1970）、50頁。
[10] Rudyard Kipling, *Kim* (New York: Charles Scribner's Sons, 1905), p. 3.

immaculate white from shoes to hat, and in the various Eastern ports where he got his living as ship-chandler's water-clerk he was very popular.[11]

これらの作品の冒頭部分を比較して明かなことは、「伊豆の踊子」と「羅生門」では、「私」や「下人」その人の説明ではなく、彼らを取り巻く自然や人物や物（その不在も含めて）が並置されているのに対して、『キム(*Kim*)』と『ロード・ジム(*Lord Jim*)』では、主人公の本質にかかわる説明から始まっている。このような英語の特質は、単に人物描写から始まる場合だけではなく、情景描写から始まる『ノストローモ(*Nostromo*)』や『インドへの道(*A Passage to India*)』においても、Sulaco や Chandrapore という場所の分析であり、並置による情景描写ではない。[12]

日本語は、カタログのように物や人を並置していく文法であり、元々、語と語の結束力はあまり強くない。つまり、語と語が従属や因果関係で強く結合しているというよりかは、それぞれの語の指示するもの（シニフィエ）が同一時間・同一空間に併存しているという関係によって結び付けられている。したがって必然性が問題になるよりも、全体的に調和しているかどうかが重要であり、その調和は印象として判断される。別のいい方をすれば、パターン認識によって世界をとらえようとするのである。そのような認識傾向から、俳句のような短詩が日本語に生まれてきたと思われる。

また、そこにあるということが重要である日本語の世界において、物や生き物の存在意義が人間（神）によって絶対的に意味づけされない、つまり、対象に人間（神）支配の法則性(摂理)が投影されないために、自然に世俗化に向かう傾向が生じる。それが端的に表れるのは絵画であろう。世界の絵画は圧倒的に宗教画が主流であり、たとえ西洋画のようにルネッサンス以降世俗的な絵画が描かれるようになったとしても、画家の自由な空想力や美的感性によって筆が動かされるのではなく、遠近法のような法則性に拘束されるのだ。それに対して、平安時代の絵巻物や、江戸時代の浮世絵にしても、教義や法則性の拘束はあまり感じられない。浮世絵などは、江戸時代に民衆の生活様式の世俗化が促進されたことと軌を一にしていると思われる。このことは、近代化が自然発生的に生まれなかったとしても、「神」によって閉じられている言説のタブローを観察や分析といった科学の楔によって解き放つ闘争を必要とした西欧語とは違って、日本語の言説空間には西欧近代の成果を取り入れる素地ができていたということが考えられる。すなわち西欧語においては、様々な物や生き物に内在する法則性が人間（神）の支配下にある語と語の強い連結に楔を入れる必要があったのに対して、日本語の並置の文法は、緩やかで排他的でない語と語の連結の為に、外来のものを吸収することが比較的容易に行われてきた。天皇を中心とした神道

[11] Joseph Conrad, *Lord Jim* ed. Thomas C. Moser (New York: W. W. Norton & Company, 1968), p. 3.
[12] もちろんこのようなわずかの例で、英語と日本語の文法の特性を判断するのは早計であるだろう。ただ、上記の作品の冒頭は、多くの母語話者の読者や批評家によって違和感なく受け入れられてきたことを考えると、使用言語の特性を巧みに利用していると判断することはあながち無謀だとはいえないと考える。

の世界観に、仏教が浸透し、それでいて神道的世界観を駆逐することはなかったように、西欧近代が日本の言説空間に吸収されたのである。

日本にとって、言説の最大の源泉は『古事記』であり『日本書紀』であるのかもしれない。しかしながら、それらから発する言説形成＝編成の大河のなかに、仏教、儒教、キリスト教が流れ込んできた。そして開国した日本に、日本語の特性、つまり、日本文化の吸収性ゆえに、西欧の知識が大量に流入してきたのだ。その知識も、「技術」という目に見えるものであれば全く抵抗なく日本人は受け入れたのであった。なぜなら、そこに存在するからである。

このようにみてくると、日本の言説空間に様々な外来種が一方的に流入してきたように思えるが、その場合でも、あくまで優勢で吸収するのは日本語の言説編成なのである。さらに、その関係は「患者」と「薬」というように、病んだ文化構造を外来のものを移植することによって回復させるという場合だけではなく、むしろ、よりよい環境を与えるという場合もある。別のいい方をすれば、日本語の文法特性としての並置と、西欧で始まった科学的分析は、前近代と近代として対立するものではなく、補強する関係にある。なぜなら、科学による物質や生物種の個々の法則性の発見は、言語のなめらかなタブローに楔を打つが、それだけではそれ以前の構造をバラバラにするだけで、再編成することにはならない。したがってその点が西欧語の弱点でもあるわけだ。そういう意味で、日本語の認識方法は、その弱点を補うことができるのである。実際、西欧絵画への浮世絵の影響は、西洋画を「遠近法」の自縛から解放したではないか。1つの視点の拘束からの解放は、単に絵画のみにとどまらず、文学などにも広がっていった。それによって、西欧語の言説をより複層的な視点を包摂できるように変容していったのである。このことは、文化や民族についての見方にも当てはまるのである。つまり、「大文字の単数の文化」から「複数の小文字の文化」認識への転換である。

一方、「西洋近代」の流入は、日本語の言説構造にいかなる変容をもたらしたのであろうか。次節において、明治以降の「知層」構造の変容が日本人の思考にどのような影響を与えてきたのかを考察してみよう。

3．日本語は本当に近代化したか

ラドヤード・キプリング(Rudyard Kipling)は、7年間のインドでの生活に終止符を打ち、イギリスに帰国する途上で日本を訪れ、憲法発布の時期の日本を描写している。[13]

キプリングは、初めて日本にやってきて、日本文化を観察するが、しかし、すぐに彼は彼の知っているオリエントの枠組みのなかでは捉えきれないものを発見する。そもそも、長崎に上陸したとき、日本人の税関職員を見て、西欧諸国の文化が日本に様々な影響を与

[13] 以下のキプリングの日本訪問に関する考察は、拙著『「反抗者」の肖像――イギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成――』（広島：渓水社、2013）の229頁から237頁の文章を一部利用している。

えていることを知る。キプリングは、波止場に下りて、鍍金の菊の飾りの付いた略帽を被った、全く似合っていないドイツ風の制服を着た若い日本人の税関職員に完璧な英語で話しかけられる。しかし、彼が返事をしても、その日本人が彼のいっていることがわからなかったので、幾分当惑しながら、彼がもっと長く日本に滞在するのなら、その日本人のために悲しんだであろうと考える。なぜなら、

> . . . [H]e was a hybrid—partly French, partly German, and partly American—a tribute to civilisation. All the Japanese officials from police upwards seem to be clad in Europe clothes, and never do those clothes fit. I think the Mikado made them at the same time as the Constitution. They will come right in time.[14]

キプリングの日本に関する予備知識は、バジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）やラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn）のような日本研究家とは比べ物にならないほど貧弱であったが、しかし彼は、来日早々日本社会の動向を直観的に捉えている。当時は、ペリー提督の率いる黒船来航によって開国を強いられて以来、西欧列強の科学技術と強大な軍事力の脅威にさらされた日本は、近代国家の形成が急がれていた。そして「脱亜入欧」というスローガンのもと、「アジア的なもの」が排除・隠蔽され、[15] 西欧の制度を模倣するという方向性が国家の政策に浸透し、突貫工事的な速さで新たな国家的枠組みが作り上げられていったのである。その象徴的な出来事が憲法の発布であり、国を挙げての大騒動であった。しかしながら、それが日本の「知層」構造に歪みを生じさせたことは、憲法発布の翌年の 1890 年に出された教育勅語を必要としたことからもわかる。[16]

一方、キプリングは、近代化した日本人がいかに西欧諸国の文化の寄せ集めとしてのハイブリッド性を身に付けていても、その下には少しも変わらない日本人がいるのを、汽車のなかでたまたま隣り合わせて坐っている新しい日本人と古い日本人を見て直観的に感じる。

キプリングの近くの座席に坐っていた、ゲートル、ツイードのズボン、黒い綾織り地の上着、立ち襟、淡黄褐色のシルクのネクタイ、犬革の手袋、それからエナメル靴を身に付けた「ヤング・ジャパン(Young Japan)」は、弁当を食べ日本語の新聞を読み終わった後、

> Young Japan. . . slipped off his boots, coat, tie, collar and waistcoat and lay down on the seats to slumber, the nape of his neck supported in default of a Japanese pillow, by the neat little handbag.

---

[14] Rudyard Kipling, *From Sea to Sea,* Part 1 (New York: Charles Scribner's Sons, 1906), p. 350-1.以下の *From Sea to Sea,* Part 1 からの引用は、この版の頁数を本文に記入。

[15] もっとも、この排除・隠蔽は極めて不徹底なもので、結果的に「アジア的なもの」は何一つ失われてはいない。

[16] 教育勅語は軍国主義のスローガンのようにとらえがちだが、西欧思想の流入による学校教育の混乱を抑えることが当初の目的であった。

> Old Japan at his side slept on a red lacquer pillow, and it was curious to note how in both men the national attitude of repose was exactly alike.[17]

この継続性を内包する日本人の表層的ハイブリッド性は、キプリングの訪れた他のアジア諸国には見当たらないものであった。たとえば、彼のよく知るイギリスの従属民であるインド人とも違う。

キプリングは、日本の首都東京において、人々に西欧文明が浸透していることを見る。10 人に 1 人は頭の先から足の先まで西欧人の服をまとっているのである。しかし、彼の目には実に奇妙な人種に映る。イギリスの大きな町で出会うすべてのタイプの人間を真似ているが、しかし日本人と話すとなるとキプリングの言葉が全く通じない。触れてみると、思っていたのとは違うのだ。呆然と通りを歩きながら、目にはいる一番イギリス的な人々に話しかけるとき、彼らの服装とは決して一致しない優雅さで丁寧にふるまったが、キプリングのいっていることが全くわからない。しかしながら、船の合図は英国式だし、線路は英国式の軌間だし、売られている商品もイギリスのものだ。通りの看板も英語だ。白昼夢の世界なのである。このとき、キプリングはインド人の紳士に対して尊敬の気持がわく。なぜなら、

> [The Babu] did not dress deceitfully in flannel or dittos, and spoke our tongue none the less. But then, the Babu had an Educational Department behind him and more Englishmen about him than ever did the Japanese. (*Kipling's Japan*, p. 169)

19 世紀末の世界において、非西欧社会で洋服を着る非西欧人はまれであっただろうし、西洋式の服装をしている者はほぼ間違いなく西欧語を理解できたであろう。インドでは、洋服を着ない「バーブー」であっても、明治日本の紳士などとは比べものにならないくらいキプリングの話すことを理解できたのであろう。したがって、キプリングの驚きは、彼が白人優位主義者であるからではない。他の非西欧圏ではありえない現象を目の当たりにしたからであった。インドよりはるかに東にある島国で、一般の日本人が全く西欧語を話せないにもかかわらず、急激に「近代化」が進んでいたのだ。

また日本人は、植民地下のインド人だけではなく、西欧人のなかでうまく立ち働く中国人とも違う。「教授」と呼ばれている旅の同伴者 S. A. Hill とキプリングは、神戸の町で中国人と日本人の違いを議論する。

---

[17] Rudyard Kipling, *Kipling's Japan: Collected Writings*, ed. Hugh Cortazzi and George Webb (London and Atlantic Highlands, NJ: The Athlone Press, 1988), p. 119. 以下の *Kipling's Japan* からの引用は、この版の頁数を本文に記入。

As in Nagasaki, the town was full of babies, and as in Nagasaki, every one smiled except the Chinamen. I do not like Chinamen. There was something in their faces which I could not understand, though it was familiar enough.

"The Chinaman's a native," I said. "That's the look on a native's face, but the Jap isn't a native, and he isn't a sahib either. What is it?" The Professor considered the surging street for a while.

"The Chinaman's an old man when he's young, just as a native is, but the Jap is a child all his life. Think how grown-up people look among children. That's the look that's puzzling you."

I dare not say that the Professor is right, but to my eyes it seemed he spoke sooth. (*From Sea to Sea,* Part 1, p. 370)

このように、キプリングは日本において、サーヒブ（sahib＝白人）でもなく「現地人(native)」でもない極東の有色人種を発見する。それと同時に、この奇妙な日本人のなかにいる中国人の顔にある、「見慣れてはいるものの理解できない何か」について疑問がわき起こってくる。そして、この「見慣れてはいるものの理解できない何か」について、「教授」に「いったい何なんだろうか。」と問いかける。「教授」はしばらく雑踏を注意深く見てから、中国人は若いころから「老人」だが日本人はずっと「子供」のままだと答える。キプリングの目にもそのように見えるものの、「教授」の答えが正しいとは断定しない。ここで注目されるのは、「教授」とキプリングの目に映った「子供」と「老人」としての日本人と中国人であろう。子供が周りの大人から多くのことを学習し身に着けようとするように、当時の日本人も西欧から様々なことを学習することで、近代化をしようと躍起になっていたのだ。そして、この「近代化」は日本人のハイブリッド性と密接にかかわっているのである。一方、「現地人(native)」といわれるインド人や中国人は西欧から「近代」を取り入れることに消極的、あるいは反発さえ感じたのは、彼らの「知層」構造がそのことによって根本から突き崩されてしまうことに対する恐怖や嫌悪があったのだと思われる。それに対して、日本人は、自らの「知層」構造が改善されることはあっても、破壊されないという安心感をもっていたのだ。[18]

それでは、「東洋」と「西洋」のハイブリッド化した日本の「知層」構造と、西欧近代の「知層」構造の違いはどの辺にあるのだろうか。

非西欧のいずれの地域においても、近代化プロセスは自然発生的には起こらなかったことは否定できないであろう。したがって、伝統的な社会構造に「近代化」という化学反応を起こさせるためには、西欧の植民地政策の下に置かれるか、自ら進んで母語に西欧近代の概念を翻訳・翻案する作業をしなければならない。後者のほうに関しては、日本が積極的に行ったのである。しかしその際、日本語の文法を大きく変えずに行ったのは、それ以前の先進的な中国から、やはり日本語の文法を変えずに「知識」を受容した経験が生かさ

[18] インド人の間でも、ヒンドゥー教徒がイスラム教徒よりも「西洋」をとりいれることに抵抗が少なかったのは、文化構造が日本に近いからかもしれない。

れたと考えられる。そのために、日本の「知層」構造の大枠は破壊されずに済んだのである。その結果、「西欧近代」から見れば不徹底、不完全なものに見えてしまうのであるが、しかしながら、「西欧近代」とは別の近代化が起こったという可能性を必ずしも否定は出来ない。

もっとも、明治以降、日本語の改良がおこなわれなかったということではない。言文一致運動、国語改革によって、確かに日本語は大きく変化してきた。[19] 21 世紀の日本人の多くは、江戸時代はおろか、明治初期の日本語すらよく理解できないくらいである。しかしこの言語の変化によって、日本人の認識方法は変わったのかというと、日本語の変化の重要な部分は、言文一致や漢字の制限による日本語の大衆化であって、認識の根本的な転換、そしてそれに伴う思考の変化には大きな影響を与えていないと思われる。

もっとも上記のような議論は全くもって概略的なもので、日本の「知層」構造、そして、言説形成=編成の変遷を究明するためには、『古事記』、『日本書紀』から幕末までの西欧の影響をまったく、あるいは、ほとんど受けなかった時代の日本の「知層」と、西欧の影響——反発も含めて——によって生まれた「知層」、そして戦後のアメリカの影響下で堆積した「知層」とを比較分析し、連続性と変容を調べる必要があるだろう。しかしながら、そのような作業は本論の及ぶところではないので、今後の課題としたい。

次節では、「西欧近代」とは別の近代化が起こったという可能性があると上述した点について、もう少し触れておくことにする。

4．非西欧の「知層」と近代化の実体

近代化が、語と語の排他的な結合によるなめらかな言説のタブロー構造に対して、指示されるもの（シニフィエ）に内在する法則性の発見でもって楔を打つことで転換し、新たな秩序で構造を編成し直すということであるのなら、「非西欧的近代」の可能性を否定することはできないであろう。なぜなら、人間(神)は西欧の独占物ではなく、世界には多様な人間(神)が存在し、人間(神)の生み出す規則性によって語と語が排他的に結合されその社会独自のなめらかな言説のタブローが作られているのであるが、それに対して、指示されるもの(シニフィエ)に内在する法則性は共通であり、その発見はあらゆる社会のなめらかな言説のタブローに等しく影響し、構造の転換を生み出すのだ。たとえば、「ヘビ」の意味や位置づけは、キリスト教言説と仏教言説で異なるが、生物学での爬虫類の一種としての「ヘビ」の発見は共有されるからである。ただ、それぞれの社会のもともとの言説構造が異なるのであるから、転換し新しく生まれる構造が全く同じものになるとは考えられない。したがって、これまでの「西欧＝近代」という主流の関係式から、「西欧⊂近代」という関係式へと認識の改訂をする必要性があるだろう。近代化の定義を「語と語の排他的な結合によるなめらかな言説のタブロー構造に対して、指示されるもの（シニフィエ）に内在する法則

[19] イ・ヨンスク、『「国語」という思想——近代日本の言語認識』（東京：岩波書店、2012）では、植民地主義と絡めて明治以降の国語改革を論じている。

性の発見でもって楔を打つことで転換し、新たな秩序で構造を編成し直す」とするなら、「西欧近代」をそっくりそのまま移植するのでない限り、あらゆる社会で独自の「近代」が起こり得るからである。ただそのような可能性と、実際に近代化が開始されるための十分な《エピステーメー》が社会に充満しているかどうかは、別問題であった。むしろ、ほとんどの非西欧社会にはそのような《エピステーメー》が存在していなかったのである。唯一日本だけが、そのような《エピステーメー》が江戸期を通じて形成されており、西欧近代を触媒とすることによって近代化へと社会の歯車が動き出したのである。

しかしながら、すでに指摘したように、日本に近代化をもたらした《エピステーメー》は西欧諸国のように言語の能動性によって形成されたものではなかった。むしろ日本語の受動性が生み出したものである。日本語のもつ強力な吸収性が、西欧近代から、近代に移行するための重要で根本的な要素、個々に内在する法則性についての知識を汲み取ったのであった。別のいい方をすれば、日本における近代化を開始させた《エピステーメー》とは、江戸後期において西欧近代に対する吸収力が既存の構造を変容させるほどにも高まっていたということだ。したがって、日本と他の非西欧社会の違いは、個々に内在する法則性についての知識を積極的に取り入れる言語を持っているか、それを拒むような言語を持っているかということである。そして西欧社会との違いは、個々に内在する法則性が楔となって前近代の社会構造を壊したか、それとも、そのスポンジのような多孔質の構造に吸収したかということである。そのため、日本の言説構造そのものは破壊的な転換がなされなかった一方、新たな変革に対して常に外因を必要とする社会構造を維持したままなのである。

日本語の言説編成にどれだけデカルト的懐疑主義が作用するのかを考えるとき、日本語の内在的破壊性の弱さを知ることができるであろう。したがって、宗教的には、まったく世界観の異なる「神道」と「仏教」が共存できるのであり、政治的には、幕藩体制になっても、天皇制は抹殺されることはなかった。相容れない、相矛盾する論理を徹底的に駆逐するような文法が、日本語には非常に弱いのである。いいかえれば、人間の主観をも含めたあらゆるものの本質のレベルへと、言葉を研ぎ澄ましていく装置が日本語には欠けている。日本人が新たな法則性を発見して既存の構造、あるいは、その一部を壊し再構成できないといっているのではない。日本語がそれを使用する人間に対してそのような発見をするように「強制」しないというのである。日本人のなかにも「反抗者」の資質を持つ者は少なくないだろうし、西欧語に熟達した場合もその言語特性から影響を受けているだろう。しかしながら、日本社会においては、その「発見」が目に見える形でない限り、認知されないか、黙殺されるのである。

一方、優劣が歴然としている場合でも「劣ったもの」が排除・抹殺されることはほとんどなく、「劣ったもの」からの激しい抵抗が比較的少ないので、「優れたもの」が大量に流入することが容易に起こるのである。そしてそのことによって、日本の「知層」の配列が急激に変容する。このように日本における変革は、内的要因による構造転換により始まるこ

とは少なく、黒船や第2次世界大戦後のGHQの支配といった目に見える外的要因の流入に依存しているのである。

5．おわりに

上述したように日本にとって、19世紀から20世紀まで「西欧近代」は日本語の言説編成の本流に流れ込む肥大化した流れであった。確かに鎖国の時代にその流入を制限したために氾濫し洪水となって日本を襲ったが、今日西欧からの流れは制御可能な支流である。一方、非西欧地域、中国やインド、そしてそれ以外の地域からの支流は、これまで制限されていたが、再び日本語の言説編成に流れ込んでくるだろう。

文字どおりの意味におけるポスト・コロニアル状況において、「日本⊂近代」、「中国⊂近代」、「インド⊂近代」等と同様に「西欧⊂近代」が、近代化された社会群の全体集合のなかの小さな集合となり、さらに、それぞれの社会の「知層」構造が一様ではないとすれば、グローバリゼーションというのは、括弧つきで扱われなければならなくなるだろう。したがって、それぞれの国の思考傾向を理解するために共通項を見つけようとする試みは、相違点の研究なくしては、完全には報われることはないのかもしれない。

このような意味で、もし「知層」が社会に住む人々の思考や価値観を方向付けるとすれば、知の考古学的分析によって「知層」構造を研究することは、対象とする社会が政治的・軍事的・教育的政策を決定づける際の要因を究明する有効な手段になるだろうし、今後その社会がどのような決定を行うかを予想することも可能になると考える。